

# 小山剛さんを偲ぶ会相次ぎ開催 遺志を継ぐ声が口々に上がる

社会福祉法人長岡福祉協会高齢者総合ケアセンターこぶし園の総合施設長を務めた小山剛さんが60歳で3月13日に急逝した。

関係団体や法人は5〜6月に「偲ぶ会」を相次いで開催した。地域包括ケアの実践者としての小山さんの早過ぎる死を悼むとともに、ときに酒席での思い出なども交え、地域包括ケアの完成を目指し、小山さんの遺志を継ぐ声が上がった。

本誌では、全国小規模多機能型居宅介護事業者連絡会、長岡福祉協会、医療介護福祉政策研究フォーラム・社会福祉法人夢のみずうみ村・つしま医療福祉グループが開催した「偲ぶ会」から主な発言を紹介したい。

**利用者のみならず地域を含めて支援**

こぶし園総合施設長を務めた小山さんは地域包括ケアを実践。平成18年度から導入された小規模多機能型居宅介護の制度化に尽力するなど施策にも大きな影響を与えた。

長岡市では、住み慣れた地域での生活の継続を求め利用者のために、「老人ホームで提供している機能を地域にもっていったら同じことができるのでは」と考え、小規模多機能とサテライト型特養などの複合的なサービス拠点「サポートセンター」等を街中に複数展開。こぶし園の入所者も元々住んでいた地域に移した。キッズルームなどを整

えたサポートセンターもあり、利用者のみならずその周辺地域を含めて支援した。

16年10月の新潟中越地震での経験を踏まえ、災害福祉広域支援ネットワーク・サングードを立上げて代表理事に就任。23年3月の東日本大震災でも被災地の支援に奔走した。

**「亡くなったのは痛手」と田中滋さん**

小山さんが副理事長を務めた全国小規模多機能型居宅介護事業者連絡会（川原秀夫代表）は5月27日、「小山剛さんを偲ぶ会」を開催。会員をはじめ研究者や行政関係者も駆けつけた。

最初に挨拶した介護給付費分科会長の田中滋さんは

開口、「亡くなったのは痛手」と強調した。小山さんの取組みの根源には高齢者の尊厳の尊重があったことを指摘。サポートセンターについて「お年寄りの横に子どもが寝そべっていた。高齢者のためだけの拠点ではなく、地域の交流拠点とした」と評価。またサングードの活動について「平時だけでなく災害時にも思いをはせた」と讃えた。

社会保障審議会長の西村周三さんは、小山さんが利用者や事業者のみならず、社会保険料や税を負担する国民の立場を考えて話していたと振り返り、「感動的だった」と語った。

小規模多機能の創設時に厚労省老健局振興課長として関わった年金局長の香取照幸さんは、「百の理屈よりも現実に合わせてみせる人であった」と紹介した。

調査研究等で何度も長岡を訪ねたという国際医療

福祉大学院教授の堀田聰子さんは、「小山さんは地道に地域に根差してコミュニティソーシャルワークを実践した」と評価した。

厚労省の歴代の小規模多機能の担当者も参加。その一人の菊池芳久さん（厚労省社会・援護局福祉人材確保対策室室長補佐）は「お願いすると断らない人だった」と、時の厚生労働大臣らが急に見学を希望したときも小山さんが快諾したことを明かした。

**「感謝、感謝です」**

小山さんの挨拶を紹介した小山さんは、連絡会の若手の面倒見もよかった。

めおといわ「ゆい」管理者の党一浩さんは「私からすると雲の上の存在だったけど、優しい方で下りて来てくれた。よく飲まされ、気がつくともどこに寝ているのかと思った」と振り返った。

「小規模の明日は任せろ」というメールを貰ったことを紹介したのは後藤裕基さん（小規模多機能ホームひばり統括管理部長）。「小山さんや小規模の仲間達と出会って変わったのは『人のせいじゃない』こと。いつかは『任せてください』といたい」と語った。亡くなる前の3月1日には、スカイプを活用して小山さんと縁の深い人達で小山さんを囲む会を開いたという。偲ぶ会はその折の小山さんからの挨拶で締め括られた。



「感謝、感謝です。本当にこない人達と出会えたことを感謝する以外ないです。私はいい人生をおくつてきているんだなと思っっています——」

「彼の思いを繋いでいく」と山崎史郎さん

長岡福祉協会（田宮崇理理事長）は5月31日、都内で小山さんを「偲ぶ会」を開催。これに先立つ同24日には新潟県長岡市内でも同様に「偲ぶ会」を開いた。

31日の「偲ぶ会」の冒頭で田宮理事長が挨拶。利用者の地域生活を支援するなどの実践者としての面や包容力のある人柄を紹介。すい臓がんのため自宅療養の後、亡くなったことに触れ、「自宅での介護・看護、ターミナルケアの当事者として最期まで手本を示してくれました」と語った。

続いて5人の関係者が「お別れの言葉」を述べた。

東大高齢社会総合研究機構特任教授の辻哲夫さんは、大都市圏での高齢化の課題解決に向けた「柏プロジェクト」に取り組む過程で知り合った。「小山さんは天才的な方。地域包括ケアを見事に可視化、『見える化』した」と評価した。全国社会福祉法人経営者協議会顧問の高岡國士さんは、「小山さんは、それまでの介護の概念をどんどん変える役割を果たした」と指摘した。

内閣官房地方創生総括官の山崎史郎さんは、小山さんと同様の60歳で、およそ20年間の交友関係があったという。亡くなる直前に言葉を交わし、小山さんが自分に言い聞かせるかのように「自分が考えてきたことは大体できた」と話していたことを紹介。ただ、「まだ人生の第2、第3コーナー」と思っていたのでは」と小山さんの内心を推察。

「後は我々が彼の思いを繋いでいくこと。我々の仲間でしたし、なんとしても繋いでいきたい」と語った。埼玉県和光市保健福祉部部長の東内京一さんは出会った頃を振り返り、民間と行政と立場は違ったが、「初めて会った感覚がせず、地域包括ケアの実践者として多く共感した」と語った。

社会福祉法人恵仁福祉協会の高齢者総合福祉施設アザレアンさなだ総合施設長の宮島渡さんは、施設に対して小山さんと同様に違和感を覚え、それぞれの地域で利用者の在宅生活を支援してきたことに触れ、「貴方は私の目標であり、まるで兄弟のような親近感を感じた」と話した。

最後に、小山さんの後を引き継いだこぶし園総合施設長の吉井靖子さんが謝意を表した。吉井さんは長年、小山さんを身近で支えてきた。昨年12月29～30日にも



小山さんは病名が分かった2月17日に病院から吉井さんに電話をかけ、「こぶし園を引き継いでほしい」と冷静に話したことを紹介。「最後の最後に大きな責任の重い指示を出して旅立たれた。これからは職員と協力し合いながら一歩一歩、歩んでいきたい。地域包括ケアシステムの完成に向けて努力していきたい」と語り、列席する関係者に協力・支援を要望するとともに、お礼を伝えた。

「わが国の高齢者介護を牽引」と中村秀一さん

「小山剛さんを偲び、語る会」が6月13日に開催された。主催は医療介護福祉政策研究フォーラム（中村秀一理事長）と社会福祉法人夢のみずうみ村（藤原茂理事長）、つしま医療福祉グループ（対馬徳昭代表）の3団体。関係者16人が、小山さんとの思い出や小山さんの実践を踏まえた今後のケアの展望を語った。主催者を代表して中村さ

んが挨拶。「わが国の高齢者介護を牽引してください」と小山さんが突然、私達の前から去ってしまった」と語り、小山さん及び藤原さんとともに、「新たな介護を創設する三人の会」を結成していた対馬さんから合同で「偲ぶ会」を開くことを呼びかけられ、開催に至ったことを明かした。

中村さんは老健局長の折に主宰した高齢者介護研究会のゲストスピーカーとして小山さんを招いたことを

「2015年の高齢者介護」を現場で実践したのが小山さんではないか」と指摘、「2025年に向けて小山さんのバトンを受け継ぐのは私達だ」と語った。

社会福祉法人共同事業きたおおじ代表の山田尋志さんは、こぶし園の利用者を地域に移行後、小山さんから「特養の分散が終わった」と話をされたことに触れ、「小山さんだからできる」といわれるけれど、できないじゃなくする気がないだけでしょ」と語った。

「小山さんから『する気がないだけでしょ』といわれないよう頑張りましょう」と呼びかけた。社会福祉法人こうほうえん理事長の廣江研さんと社会福祉法人青山里会常務理事の西元幸雄さんは、全国老協若手会を育てるために設置された21世紀老人問題懇話会で平成9年4月に



知り合って以来の仲。

廣江さんは、「先を読んで理論武装して現実に移す。天才だと思った」と評価。小山さんや西元さんとレジデンシャルケア研究会を立上げ、今年で15回目。「日本の地域包括ケアをしつかりやっていきたい」と西元さんも小山さんのことを「論理的でしかも実践家だった」と語った。また福祉事業者の「CS」は、クライアントとコミュニティの満足度を追求することだと教わったと話した。

「小山さんを偲び、語る会」参加者

（順不同。敬称略）

- ▽対馬徳昭▽中村秀一▽山田尋志▽廣江研▽西元幸雄▽川原秀夫▽中井孝之▽田中滋（慶應義塾大学名誉教授）▽高橋紘士（高齢者住宅財団理事長）▽辻哲夫（東京大学高齢社会総合研究機構特任教授）▽藤原茂▽山崎史郎（内閣官房まち・ひと・しごと創生本部地方創生総括官）▽宮島俊彦（内閣官房社会保障改革担当室長）▽大島一博（厚生労働省保険局総務課長）▽田宮崇（長岡福祉協会理事長）▽吉井靖子（同高齢者総合ケアセンターこぶし園総務施設長）

模多機能の創設などが盛り込まれた同研究会の報告「2015年の高齢者介護」は、平成17年の介護保険制度改正のベースになった。

模多機能の創設などが盛り込まれた同研究会の報告「2015年の高齢者介護」は、平成17年の介護保険制度改正のベースになった。

模多機能の創設などが盛り込まれた同研究会の報告「2015年の高齢者介護」は、平成17年の介護保険制度改正のベースになった。

模多機能の創設などが盛り込まれた同研究会の報告「2015年の高齢者介護」は、平成17年の介護保険制度改正のベースになった。